

早春の候 宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部会員諸兄に於かれましては、益々ご清福の段 大慶至極に存じ上げます。

皆様には日頃より当支部運営に際して特段のご高配を賜り、深甚なる敬意を表すと共に、倍旧のご支援を伏してお願ひ申し上げる次第です。

一月の防衛協会関連行事は十一日の「えびの駐屯地新春交換会」で開幕し、十八日に宮崎神宮社務所に於いて日本会議宮崎理事會、二十二日は熊本国際交流会館で、同じく日本会議後期九州ブロック會議と続きました。

さて産経新聞は三十日、昨年十二月中韓を歴訪したバイデン副大統領が、「韓国の朴大統領に対して事前に『安倍氏は靖国神社に参拝しないと』と言っておいたがあなたが不参拝を表明すれば、朴氏は会談に応じるのではないか」と、日本の頭越しに伝えていたと報じました。

総理の靖国神社を巡っては、「米国の失望」が大きく報道されていますが、産経新聞の報道を見ると、バイデン副大統領の動きが大変不可解である事が分かり、産経はそこまでは書いていませんが、日本政府の当事者が米国に対して不信任感を持ったとしてもおかしくない緊張が見て取れます。

何故頭越しに朴氏にそんな事を言ったのか？首相は直ちに「私は第一次政権の時に靖国に参拝しなかった事を『痛恨の極み』だと言って、衆院選に勝った。参拝は国民との約束だと思っている。いずれかの段階で行くつもりだ」と自身の真意を告げ、参拝の意思を明確に伝えたものでしたが、バイデン氏はあっさり「行くか行かないかは当然、首相の判断だ」と答えたそうです。

首相はさらに、日韓首脳会談を阻む最大の壁は靖国問題ではなく、むしろ慰安婦問題だと説明しましたが、バイデン氏がどこまで理解したかは不明で、只靖国参拝に関して「首相の判断だ」と認めていた事から、日本側は米国が二十六日の首相の参拝に「失望」まで表明するとは想定外だったようです。

小泉首相が靖国参拝した当時のブッシュ大統領は「それは日本の国内問題」と一蹴し中韓に日米同盟の強い絆を誇示しましたが、オバマ現政権はアジアに軸足を移すと云い乍ら、一般教書演説でも殆ど触れられていませんでした。

ここにも国防を外国に頼る危うさが潜み「祖国は自らの血と汗で贖う」との矜持を持たぬ国民が、亡国の民となった事実が過去の歴史が示す通りです。

さて先月十六日、小野田寛郎元陸軍少尉(九一歳)が肺炎の為、都内の病院で死去されました。終戦を知らずルバン島で三十年間に亘り後方攪乱任務を継続し、昭和四十七年十月十九日フィリピン・ルバン島の密林で、戦闘中の小野田寛郎(ひろお)さんが発見されたとの報道は鮮明に記憶しています。

一時地元警察と交戦状態になり再び姿を消して四十九年三月に投降した時には、既に戦後二十九年が経過しており、当時五十一歳でした。大正十一年、和歌山県亀川村(現海南市)で生まれ、昭和十九年に諜報員などを養成する陸軍中野学校を卒業後、情報将校としてフィリピンへ派遣され、同二十年の終戦後も任務解除の命令が届かず、ルバン島の密林にこもって戦闘を続け、四十九年三月に任務解除命令を受けて漸く帰国を果たす事が出来ました。

その後五十年にブラジルへ移住し牧場を開き、平成元年には小野田自然塾を開設し、ルバン島での経験を基にキャンプ生活を通じた野外活動でボランティアの育成などに尽力致しましたが、近年は都内で生活し、国内各地での講演活動を行っていたようです。

小野田元少尉の御霊に、哀悼の誠を捧げたいと存じます。 合掌

平成二十六年二月一日

宮崎県防衛協会青年部会 宮崎支部 支部長 小倉和彦

